□6月８日説教（隅野徹牧師）短縮版
「教会のたんじょう」(使徒言行録2：37～42)

使徒言行録2章に描かれたペンテコステとは神さま、イエスさまの霊である聖霊がはげしく降るという出来事です。イエスさまは復活されたあと、弟子たちの前に姿をあらわされ、ともに過ごされました。そして40日後、天にのぼられたのです。弟子たちは死を打ち破って復活なさった主イエスが、この先も自分たちと一緒にいてくれるのではないかと期待していたと思います。けれども主イエスは、自分たちのもとから遠く離れた天へと昇っていかれたのでした。

しかしイエスさまは弟子たちのことを見捨てて、天に行かれたのではありません。弟子たちはイエスさまが天に昇られる前に言われた、「前に私から聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。」という言葉を信じて祈り続けました。

2章1節の「一同が一つになって集っている」、これは弟子たちが心をひとつにして、約束された聖霊がくだるのを祈っていたことを表すものです。そして約束された聖霊が弟子たちの上にくだると、それまでイエスさまに頼りきりだった彼らが全く変えられ、神の言葉を自ら語る者になったのです。その言葉によって、聞いていた人たちのうちの多くが自分の罪に気づかされ、その罪から救われたいとねがったのです。そしてイエスさまの名によって洗礼をうけたひとが3000人与えられました。これが教会のたんじょうした瞬間なのです。

イエス・キリストは目に見えなくなりました。けれども聖霊の力を受けた人たちが、力をうけて神の言葉を伝えるようになったのです。このとき生まれた教会の命は、その後の苦しいできごと中でも絶えることはありませんでした。逆に世界中に広がり、そして今、遠くはなれた日本でも息づき、わたしたちの教会もたんじょうしたことを覚えていましょう。（終）